# とある仮面の封印目録(シールストーリー)

千藤　光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある仮面の封印目録（シールストーリー）

【Ｎコード】
Ｎ３２０１Ｚ

【作者名】
千藤　光

【あらすじ】
２００万人もの学生が日々『能力開発』に勤しんでいる街……学園都市。そんな学園都市に突如として現れたアンデットを封印し、学園都市の住人の笑顔と平和を守るために仮面ライダー剣（ブレイド）となり、剣崎真一は戦うのであった！そしてクラスメイトの不幸少年…上条当麻のせいで魔術師達との戦いにも巻き込まれてしまうことに！ありそうでなかった禁書とブレイドのクロスノベル。ここに開幕！！

## プロローグ：誇り高いバイト

学園都市。その名の通り、大小様々な教育機関と２３０万人もの住民を抱えている学生の街である。

そんな深夜の学園都市をバイクで駆け抜けている少年が一人いた。

《現場まであと２ｋｍ！急いで！剣崎君！》

「ＯＫ！広瀬先輩！」

ヘルメットの通信システムでやりとりを交わし、バイクのアクセルを全開にして、現場まで少年は急いだ。

少年の名は剣崎真一。彼は人類基盤研究所［ＢＯＡＤＯ］が開発したライダーシステムで仮面ライダーブレイドへと変身し、日々アンデットと戦っている。

（見えてきた！）

何かの倉庫の前で、ライオンのような二足歩行の生き物……ライオンアンデットが暴れていた。

キキイッ

真一はバイクから降りた。

そして一枚のカードと、銀色の四角いバックルを取り出した。

カードには背中にトランプのスペードのマークが書かれているヘラクレスオオカブトが描かれており、横側にはスペード　Ａ　ＣＨＡ

ＮＧＥと書かれている。これが、ラウズカード、スペードのＡ［ＣＨＡＮＧＥ］だ。
そのカードをバックルのスリットへ差し込み、腹部に装着する。するとバックルから、カードが出てきて腰に巻きつきベルトとなる。そして真一はゆっくりと右手を斜め左へと移動させ、顔のところで止める。そして、

「変身！！！」

のかけ声と同時にバックルについているハンドル…ターンアップハンドルを引く。

ｔｕｒｎ　ｕｐ

すると電子音と同時に青色でさっきのヘラクレスオオカブトが描かれた青色の壁が現れる。

「ウォォォォォ！！」

そして真一はその壁をくぐり抜け、仮面ライダーブレイドへと変身した。

「オリャアアアアアッ！！」
先手を取ったのはブレイド。ブレイドはライオンアンデットに強烈なパンチを食らわす！
「グハアッ！」
ライオンアンデットが少しよろめく。
「ダアッ！ヤアッ！ハッ！オラアッ！」

ブレイドは攻撃の手を緩めない。

「ダアッ」

そして跳び蹴りを一発食らわせ、腰からブレイドの武器「醒剣ブレイラウザー」を引き抜き、ブレイラウザーのオーナメントを展開し、カードを一枚抜き取る。そして、スペードの２「ＳＲＡＳＨ」のラウズカードを取り出し、ブレイラウザーのカードリーダーに読み込ませる。

《Ｓｒａｓｈ》
電子音が流れる。

「タアッ！ハアッ！ヤアッ！ウリャアッ！」

そして切れ味の上がったブレイラウザーでアンデットをメッタ切りにする。
当たりには緑色の血が飛び散る。
そしてブレイドはまたオーナメントを開き、カードを取り出し読み込ませる。

《ＴＡＣＫＲ》

電子音が流れ、ブレイドは体を小さくして構えを取る。

「ハアァァァァァ」

力を貯めて、

「ダアァァァァァッ！」

アンデットめがけて思いっきり突進する。

「ギャァァァァァァッ！」

ドカァァァァァァン

アンデットはぶっ飛ばされ爆発し、腹部のバックルが開く。

しかし、まだ死んではいない。

アンデットは不死生命体。ラウズカードに封印しないかぎり体は残るので、体力が回復しバックルが閉じるとまた復活してしまうので暴れ出す恐れがある。

ブレイドはブレイラウザーから何の絵柄のないカードを取り出し、アンデットへと投げる。

カードはアンデットに刺さり、アンデットを封印するとブレイドの元へと戻っていく。

スペードの３　ＢＥＡＴ

「広瀬先輩。終わりました。」

仮面の中の通信システムで指示を出していた広瀬に呼びかける。

『ＯＫ！もう遅いから直接寮に帰りなさい。』

「わかりました。じゃあ切りますね。」

そう言って通信を切り。バックルのハンドルを引き、変身を解く。

そして真一はう～んと伸びをした。

「ふぅ～。今日も頑張った～。」

夏の制服の上にＢＯＡＤＯのマークがついたジャージを着ている少年はバイクに近づき、ヘルメットをかぶる。

「あっ！バイト代の請求してねえ！」

などと独り言を言いながらバイクにまたがる。

今の彼にとってはバイト代などはどうでもいいのだが。

時計はとっくに2時を過ぎていた。

「5時間しか寝れないのか～。」

そうつぶやきながらアクセルをふかし、自分の寮へと戻っていった。

腕時計の日付は7月１９日になっていた。

その日があんな日になるかなんて真一は想像もしていなかった……

To Be Continude

## プロローグ：誇り高いバイト（後書き）

初めての人は初めまして。千藤　光です。
正直才能のない糞みたいな文章なので、わかりづらいと思うのですか、作者が気が短く、せっかちな性格なので、ここまで薄っぺらく読み応えのない話になってしまうのです。
まだまだ下手くそですが、なんとか上達していこうと思っているので、よろしくお願いしますｍ（＿　＿）ｍ

## ｄｒａｗ１：学園都市の非日常な日常（前書き）

一応一話目です。最初の頃は意外にもｐｖが伸びたりしていました。
今回もやっつけ＆ａｍｐ；勢いですがそれでもいいという人はどうぞ楽しんでいってください。
ちなみにオンドゥルはないのであしからず。

## ｄｒａｗ１：学園都市の非日常な日常

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

その声で少年は目覚めた。

「んぁ～～……今日は何やらかしたんだ～～。」

少年の名は剣崎真一。仮面ライダーブレイドの装着者である。

真一は昨日の深夜、不死生命体アンデットと戦って来ているのでかなりの寝不足なのである。

結局あの後帰りついたのは午前2時半であった。

真一はあらかじめ作っておいた握り飯を二つつかみ、自分の部屋から出た。

真一が住んでいるところは一応学生寮だが、マンションのように作りはそれなりにしっかりしている。

真一は隣の部屋の玄関を開けた。

「どうした上条～。」

真一が靴を脱ぎ、ツカツカと部屋の中へと入っていくと、一人の少年が慌てて身支度を整えていた。

彼の名は上条当麻。世界一……いや、宇宙一の不幸者である。

「どうした…そんな急いで……」

「時計を見ろ！！！」

上条はビッと時計を指差した。

真一は時計を見た。

７：５３

遅刻決定である。

「だぁぁぁぁぁぁ！俺もヤベェェェェェェェ！！」

真一は急いで部屋に戻り鞄をひっつかみ、握り飯を口に押し込みドアに鍵を閉め、駐車場まで一直線に走った。ちなみに服装は昨日帰ってから制服＋ジャージのまま寝たので、着替えなかった。

「あいつ今日に限って寝坊しやがって！」

真一はいつも上条の「不幸だぁぁぁぁぁぁ！」で目を覚ます。毎朝やれケータイが壊れたのやれ空き巣に入られただの彼の身には不幸の雨が降り注いでいる。

真一はその叫びを目覚ましにしていたのだが、よりにもよって今日に限って寝坊……

真一は上条の不幸に巻き込まれてしまった。

「上条…許してくれ！」

そう呟いて、真一は駐車場に停めていたバイクにまたがりアクセルをふかす。仮面ライダーブレイドの専用マシン、ブルースペイダーである。

真一は基本遅刻じゃなくてもバイクで通学している。いつアンデットが出て雇われ先の、人類基盤研究所［ＢＯＡＤＯ］から呼び出されるかわからないからだ。

真一はアクセルいっぱいで学校まで一直線に走った。

結局、真一は遅刻し、上条は、信号に１０回連続で引っかかったり、

途中で車に弾かれかかったり、不良に絡まれたりで、４０分送れて学校に来た。

そして放課後

明日から夏休みであったのを真一はすっかり忘れていた。

「上条…もう帰ろ……」

真一は早く帰って寝たかった。

真一はここ１ヶ月働きまくりだった。

１ヶ月前位に学園都市にアンデットが出没するようになり、何故か

人類基盤研究所の［ＢＯＡＤＯ］から仮面ライダーにスカウトされて、戦おうが戦わまいが何かしら働かされた。

「ん？おお……。なんかすごい疲れてんな～？」

上条が疲労困憊と言わんばかりの真一の顔を覗き込む。

「バイバーイ、カミやーん、シンイチー」

後ろからクラスメイトの声が聞こえた。

しばらく歩くと担任の先生とすれ違う。２人はうっかり見逃すところだった。それもそのはず、先生というよりは小学生と呼ぶのにぴったりだったからである。身長１３５ｃｍ、安全面の理由からジェットコースターに乗れなかったという伝説を持っているらしい。

「小萌先生サヨナラ～」

「なら～っす」

上から、上条、真一の台詞。

「は～い、また明日♪」

先生も返事をしたが、なんかおかしかった。

「絵えぇえええぇぇぇぇぇぇぇエェえぇえええ！！今なんと！」

上条はかなりテンパっている。

「あれ～2人とも知らないんですか？明日からの指定者補習。上条ちゃんは開発の単位がオールレッドでしたよ～。」

先生が生徒名簿を抱きしめながら（体と名簿の大きさが合わないので、どうしても2人には抱いているように見える。）上条を見た。

「えぇ！？上条はともかく、俺は大丈夫ですよね！？？」

真一は補習を受けない自信はあった。一応これでも頭はいい方で、全ての教科において良くも悪くも安定した点数を取っていた。

「うーん……剣崎ちゃんは授業態度が悪いですから。」

真一はギクリとした。結構授業時間に疲労のあまり寝てしまったことがかなりあったのである。

♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀

「「はあ～～～～～～～～～～～～～～」」

2人揃って特大のため息をついた。

「また目隠しポーカーとかスプーン曲げとかやらされんのか～～～」

上条はうなだれて歩き、真一は力なくブルースペイダーを押しながら歩いていた。

「記録術（カイハツ）…か……」

記録術（カイハツ）とは、学園都市特有のカリキュラムのひとつである。

面向きこそ記録術とか暗記術とか言ってはいるが、実際は投薬や生態刺激、催眠暗示などによって人為的に『超能力』を開発するというとんでもないものである。

能力は個人の資質などに左右されるが、一通りのカリキュラムをこなせばたいていはスプーン曲げとかはできるようになる。

『一大能力開発機関』

それが学園都市のもう一つの顔である。

「なんかおごろっか？」

バイクを押しながら上条に聞いて見た。

「まだ夕飯には早いけど、腹減ったろ？」

タイミング良くファミレスの前。

---

夏の新作メニュー！

苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア

1250\

（うわっ！こんな看板詐欺みたいなもの食うやついんのか？）

真一は思った。

「オレこれ食いたい！」

（いたよ……）

ｐｉｐｉ――ｐｉｐｉ――

真一が呆れているとき、ブルースペイダーの連絡無線かに広瀬からの通信が入った。

《剣崎君！アンデット出現！場所は大３学区、エリア１６よ！！》

「ＯＫ！広瀬先輩！」

そしてヘルメットをかぶり、ブルースペイダーにまたがる。

「ってことなんでこれで何か食っといて（１３００円くらい渡しときゃいっか）」

と言って真一は上条に小銭とお札らしきものを渡した。

そして真一は現場へと急いだ。

上条が手の中のものを確認すると、３００円と買い物メモが握りしめられていた。

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁ！」

♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀

真一が現場につくと、コウモリのアンデット、バッドアンデットが暴れていた。

真一はブレイバックルとチェンジビートルのカードを取り出した。

そしてバックルにカードを挿入して、腰に巻く。

左手を腰に、右手を斜め左に持っていく。

「変身！！！」

のかけ声と同時にバックルのターンアップハンドルを右手で引く。

《ｔｕｒｎ　ｕｐ》

電子音と共に青い壁が現れ、それをくぐり抜けて真一は仮面ライダーブレイドへと変身した。

「ダァッ！タアッ！ダァッ！」

先手必勝、ブレイドはパンチの応酬でバッドアンデットにダメージを加えていく。そしてベルトの左側のホルスターからブレイラウザーを引き抜き、斬りつける。が！

バサッ

バッドアンデットは空中へ回避して、そのまま逃げようとした。

「あっ！待てコラ！！」

ブレイドが追いかけようとしたその時、羽を銃弾で打たれ、バッド

アンデットは墜落した。

「谷川さん！」

後ろには、銀と緑のベルト、ワインレッドのボディ、ノコギリクワガタとダイヤのマークをモチーフとした仮面の仮面ライダーギャレンが専用の武器、醒銃ギャレンラウザーを構えて立っていた。

「後は私に任せなさい。」

そしてギャレンはギャレンラウザーのオーナメントを展開し、カードを一枚取り出す。そしてラウザーに読み込ませる。

ダイヤの２　ＢＵＲＥＴＯ

《ＢＵＲＥＴＯ》

電子音が流れ、さっきより威力の増した銃弾でバッドアンデットを打ち抜く。

ギャアァァァァァ！

アンデットにダメージが加わる。

そして近づき、パンチとキックを交互に食らわす。

そしてまたラウザーから2枚カードを取り出す。

《ＦＩＲＥ》

《ＡＰＰＡＲ》

するとギャレンの右腕に炎のが灯る。そしてバッドアンデットに思いっきりアッパーをする。

「タアァァァァァァ！！」

ギャアァァァァァァァァ！！！

ドカァァァァン

アンデットのバックルが開く。そしてギャレンが無印のラウズカードを取り出し、アンデットに投げる。そしてアンデットが封印されるとギャレンの元へ戻っていく。

「ありがとうございました。」

ターンアップハンドルを引き、真一は変身を解く。

「はぁ…」

ギャレンも同じ要領で変身を解く。

「全く……どんだけ一方的に攻めるのはよくないって言わせれば気が済むのかしら。」

「すみません。」

「状況と相手に合わせて戦いかたを考える！ライダーの基本でしょ！全く……」

彼女の名は谷川朔夜。仮面ライダーギャレンの装着者で、先輩ライダーである。黒のサラサラのショートカットに、少しつり目で、スタイルも抜群である。

「今度からバイト代の減額も考えた方がいいわね。」

そう言ってヘルメットを被り、ＢＯＡＤＯへと帰っていった。

（じゃあ今日は帰るか……）

ライダーは当番でＢＯＡＤＯに待機するという形をとっている。ちなみに１週間おきである。

「よっしゃ〜〜〜！！今日は寝るぞ〜〜〜！」

辺りはすっかり夜になっていた。

真一はバイで自宅へと急いでいた。

ズッドオォォォォォォォン

どこかで落雷が起こった。

「あいつ……またビリビリ中学生といちゃこいてんのか？」

とつぶやき、またバイクを走らせた。

しかしこの落雷が少年の運命を狂わしてしまうかなんて誰にもわからない。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｄｅ

## ｄｒａｗ１：学園都市の非日常な日常（後書き）

ラウズカードのスペルは自信ないです。直す気もありません。

そして予想外の出来事が……まさかのギャレンが女……ネタキャラには絶対にしないぞ！

もし質問、アドバイス、批判、ダメ出し、などがあったら感想にお願いします。

もし良かったら次回もお楽しみに（＾＾）／～～～

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3201z/

---

とある仮面の封印目録(シールストーリー)

2011年12月23日02時47分発行